連載――「連合の時代」を考える――⑤

大衆を信頼して闘い抜け

資本の包囲網突破の道

対談

東京都立大学総長
沼田 稲次郎

元総評事務局長
総評顧問
岩井 章

編集部　「連合の時代」といわれるなかで、労働運動の現状をどうみておられるか、どういうご意見をお持ちか、また政治状況、野党のあり方などについてどのように考えておられるか、率直なお話合いをお願いしたいと思います。

片肺飛行の総評

岩井　一口にいうと、いまの労働組合運動の相当部分は資本の包囲網の中にだんだん入りつつあるという感じだね。同盟とかJCというのは労使一体の協調組合、資本から独立していない組合だね。電機労連なんかは少々ニュアンスが違うが。ほかは大衆のもっているものを組織してぶつけるという発想に立っていない。総評も、いうならば片肺飛行、つまり民間の相当大きい部分が完全にエンジン停止、そこで残っている戦闘性をもっている私鉄とか、全金とか、全港湾、あるいは公労協とかが一生懸命やっている。ところが、こ

の部分にまでだんだん包囲網が狭められてきていると思うね。

どうしてそうなったのか、それをどうやってやればいいかということが、考えることなんです。結局は資本の側が困難になっている。困難になればなるほど必死になって攻撃力をかけてくる。強まるというよりは、やけのやんぱちという言い方になるでしょうけどね。

資本の側はいま三つの目標――本質は一本なんですけれども――を立てている。一つは、労働組合を丸抱えすること、もう一つは、革新陣営の中にくさびを入れて、保守プラス中道で政権を維持する。この労働組合の丸抱えと中道政府とはうらはらの関係になっていると私は思います。三つめは、それを補う意味で政治、司法、思想、文化全体を反動化させる。ときによれば強権的な弾圧をも辞さない。最近政府は大国主義路線、軍国主義への傾斜を非常に強めている。そして、それを国民統合の理念にしようと懸命のように思う。これは従来とは全く異った段階に入ったということだ。政治的には民社・公明を抱えこもうと努めている。民社の場合は、かねてから自民党と提携するといっていたから別に不思議はないのだけれども、最近の公明党の変りようは、はっきりしたもので、革新中道といってきたのをだんだん着物を脱いで、政権受け入れの準備に大わらわの感じだ。その公明党と労働組合の関係でも多少従来のニュアンスとは違ってきた。これはだれがそうしたのかどうか知りませんけど、公明党大会に総評系の各単産の委員長がずらりと並ぶ。私は公明党の大会に並んでもいいと思う。独占や自民党とも接触しないわけにはいかないのが労働組合だから、それはいい。主体的な認識をもった上で出席するなら一向に差し支えない。しかし、出席の態度、動機をみてみると、あまりスッキリしない。あいまいな態度のままつき合っていくと、社会主義政党と労働組合の協力という原則がうすれてしまう。それをねらった演出だとしたら、ここにも保守プラス中道の大きな網を感ずる。

総評自体も非常に苦慮しているんでしょうけれども、そのような意味で総評自体がだんだん単産レベルから崩されていっているようにみえる。しかし、職場の方はどうかというと、私の幾つか知っている例でいうと、たとえば、全自交の中では会社がつぶれて生産管理をやって闘っている組合が幾つかある。全金でもペトリカメラの例のように経営管理、生産管理で闘っている。それが一般的になれるかどうかは別にして、首切りなどについては徹底的に抵抗する、そういうところに新しい芽があるわけです。

ところが同盟でもJCでも上の方の労使が一体となって現場を抑えてますね。これだけ不況ですから工場閉鎖も起こる、肩たたきも起こるわけだけれども、そういうものに対して何ら抵抗を指導しない。抵抗を指導するところじゃなくて、労使が一体となって臨時工の首切りをやる。臨時工だけで間に合わなければ本工の方も肩たたきを了承してだんだん減らしていく。要するに、労使が完全に一体となって現場を抑えている。

しかし同盟やJCの中にも幾つかの情報があるんですが、結局は抑え切れずに山猫ストライキ的なものが出てくるんじゃないか。ある人は日本の労働者は山猫ストライキはしないというようなことをいいますが、私はそう思わない。権利意識が育ってきてますからね。やがてはがまんし切れずに、展望があろうがなかろうが爆発して下から揺する。

私は、いま丸ごと呑み込まれないためには、下の方を強めて現場・工場でどう抵抗するのか、それをどうすれば農民や漁民、つまり地域の方に伸ばしていけるか、一口にいえばそれしか脱出口はないだろうと考えている。上の方でいろいろ考えても、上の方のやりとりで幾らやっても脱出する道はないんじゃないかと……。

運動を指導する主体の形成

沼田　もともと日本の組合の中にはいまのような傾向にいく公算は前からあった。資本としちゃ丸抱えをやりたいということはいまに始まったことではない。革新陣営にくさびを入れるというのも、これまたいまに始まったことでもない。しかし、深刻な不況の中でそれに対する抵抗力が弱くなった。というか、それが本音で物をいう

ようになったということかもわからんけれどね。

近頃は連合時代というようなキャッチフレーズの中で組合も振り回されている感がある。大衆からもう一遍鍛え直せということはよくわかるんだが、そのとき大衆を指導する主体的な力量をどこに求めるかということですよ。いまの話だと、全国単産は大きくみればどうも皆資本の側にもっていかれる。総評だって怪しいぞ、こういったら、それじゃ下の方をだれが組織して、どうもっていくかという問題はどう考えるの？

岩井　そこが弱くて、本来ならば政党なんですね。あるいはナショナルセンター、あるいは産別の中のよい部分。政党では社会党、共産党が考えられますね。これもやはり十字砲火を浴びててなかなかちゃんとした指導をし切れていない。し切れていないというのには方針の上の弱さもあるわけですけどね。つまり大衆運動を発展させる中で党勢を伸ばしていくというよりは、やっぱり攻められているから、自分の家を守るということに精いっぱいになってますね。

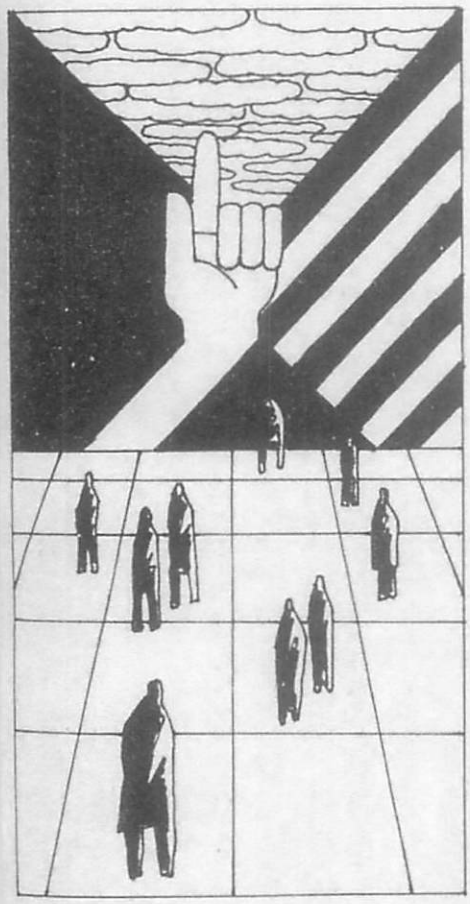
沼田　大きな構造の中では社会党も共産党も攻められているということなんだろうが、社会党それ自体が連合政党というか、共同戦線党的性格をもっているといわれている。共同戦線的性格の政党というのはおかしなものなんだけれども。それがあのとおり、ここ一年ほど何をやってたか考えてみりゃわかる。たんに保守陣営から攻められたからというだけの問題だろうか。自分の方に何もないのか。自分ら自身の中に多くの問題をもっていたんじゃないか。

対談——大衆を信頼して闘い抜け

岩井　おっしゃるとおり。つまり、いまいわれた共同戦線党とは、さまざまな意見をもっているということでしょう。そのさまざまというところへ攻められると弱さが出るんですね。共産党の場合は、さまざまな思想じゃないんですね。ここで問題が起きているのは民主と集中の扱いが必ずしも十分な成果を上げてない、うまくやってない。社会党の場合は、攻められても自分がきちんと固まっていれば平気なんだが、攻められるとさまざまというやつが顔を出す。そこでこの一年、二年は……。

沼田　攻められているという側面だけからみれば共産党の方は、はるかに攻められている。むしろ、いま問題なのは共産党を置き去りにしたような連合政権の話ばかりがどんどん進んでいるということだ。これを一体、気にしないでみておれるのかね。いままでも共産党を孤立させたり置き去りにするということは、戦後絶えず行われてきたんだけど、社会党は必ず最後の一線で踏みとどまっていた。ナチスの経験からも、共産党を孤立させたらいけない、抱えていかなきゃ本当の統一戦線はできないという考え方が拒否できない党の一つのプリンシプルみたいなものとしてあった。ところが近頃そいつも怪しくなってきている。連合構想というのも、だんだん共産党を孤立させるという方向に動きがいっている。そういう点では大きくみれば、攻撃はむしろ共産党にかかっていると思う。ところが社会党の「初心」のようなものが、どうもここしばらくの間おかしいのじゃないか。乱れに乱れているという感がしないでもない。

元に戻るんだけど、政党が大衆を指導するというが、その政党自身が、それをやり得る力量はない。それは別としても政党がリーダーシップをとって組合を組織するというタイプがいいのか。組合のリーダーたちこそが、まさに組合を組織しなきゃいかんのじゃないか。



その組合のリーダーを色分けしちゃって、こいつはだめ、こいつはいい、そう簡単にいえるのか、いえないのか。その点どうなんだろう。私は、どの組合も多かれ少なかれリーダーたちもやっぱり体制にある程度コミットしなきゃどうもならなくなっている、巻き込まれているかどうか知らんけど、ともかく首をつっこまざるを得ない状況の中にある。産業の状況やらいろんな事情によって、ある場合には一定の距離をもたなきゃならないところもあるだろうし、もっと近づいていくところもあるだろうし、組合もいろいろとやり方があるんだと思っているんだがね。問題は大衆を基盤にして指導し、ていくという主体の形成ですよ。それがどこに求められるかということが、いま非常にむずかしい。

多様化の中で接近する政策

岩井　先生のお話はよくわかる。幾つかの私の意見に対する批判点もあるんですけど、まず社会党、共産党の問題をいうと、私は、攻められてる点では共産党だけじゃないと思いますよ。共産党の場合は大衆運動に影響力がないと独占はみている。社会党については、もっとせっぱ詰まった意味合いで攻められている、あるいは誘惑がある。

保守プラス中道を成し遂げようとするときに、かぎを握っているのは公明党です。その公明党は中道革新といってきた。その看板がある以上は社会党の一部を連れていかない限りはうまくいかない。願わくば全員をつれていきたい。少しでも連れないと、ちょっと行きにくい。だから社会党には攻められている要素と誘惑の要素とある。

沼田　誘惑も攻められておる一つだけどね。

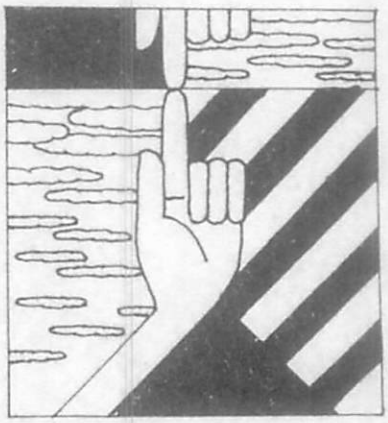
岩井　また労働組合の幹部について、労働組合ですから敵と接触しなきゃいけませんね。遠くの方でやあやあといっているわけにはいかない。これはそのとおり認めます。ただコミットするときに、いまお話のプリンシプルをきちんともってないと、向こう側にそっくりもっていかれちゃう。この場合のプリンシプルとは、労働組合は資本とは違うんだ、もっと私流にいわせれば敵対関係にある。いうならば反独占とか、反資本主義ということだと思いますけれどね。いま、それもだんだん境界線があまいになっている。同盟系の全部とか、JCの全部とは思いませんよ。しかし、そういう傾向を助長するようなイデオロギー攻撃もあるわけですね。労働組合だから接触することをちっとも私は反対していません。

沼田　ぼくもあんたのいわんとすること賛成なんですよ。敵対意識までもたんでもいいが、違っているということを自覚しろというのは、それはそのとおりで……。

岩井　つまり独立っていうことでしょうね。

沼田　そう。自主独立の立場を自覚しなきゃいけないんだが、その根底には社会の対立構造をつかんでおかなければいかんでしょうね。単に並列的に違うんじゃないんだと思う。そこのところが近頃いわゆる価値の多元化とか、思想の多様化、あるいは革新陣営内部における多極的傾向、これはスターリン批判以後世界的にあるわけ。したがって、そういう面で多くの政党が生まれるのは当然だ、こういうところがある。多党化すれば連合問題が起こるが、価値の多元化と同時に価値観の近接があるんですよ。たとえば、いい例にユーロコミュニズムがある。ユーロコミュニズムというのは社会民主主義と政策面なんかでは、あまり違わんようになってきている。先進的民主主義を通して社会主義への道というのがあるいはプロセス（過程）としての革命とか、いろいろいわれているけれど、革命というのは移行していくものじゃなくて、本当は止揚するものなのですね。どういう時点でその止揚をとらえるのか、そいつはいまだによくわからんのだが……。しかし、そのようにユーロコミュニズムの流れが出ている。

また保守陣営にしても、今日の状況ではかなり改良的な政策を取り入れなければならなくなっている。これは対症療法としてというよりは構造的にそうせざるをえないというものでしょうね。たとえば景気回復の問題一つとらえてみても、福祉志向型の公共投資をやると一応はいう。国民の購買力を刺激する方向へやれともいってい



る。決して保守党も国内市場を豊かにすることに反対しているわけではない。福祉もある程度はやっている。欧米諸国より支出は低いということはいえるけれども、ある程度までいっている。賃金はいまじゃ日本は相当のところまできている。現在の資本主義構造そのものの中で、とにかくこの不況を脱却していくためには革新がいっているものにある程度接近している。革新の方も、共産党でも社会党でも、現在を踏まえた上で不況を乗り越えて失業を少なくしていくというようなことになれば、打つ手はそう違わない。賃上げでも、下げろ下げろとブレーキをかける傾向が資本の側にあるんだけれども、といって全部賃金を下げてしまう、冷えさせてしまっていいかということになれば、保守陣営の中にもいろんな問題がある。反論があり得るわけですね。

革新陣営でも、片一方に雇用の問題を抱えているときに、どれだけ賃金を上げ得るかということになると、やはりある程度ブレーキがかかる。そういうポリシーの接近が一方にある。

価値観の多様化というけど、多様なものがそんなには違わない。対立的に多様でなくなってきている。そういう状況の中では構造的に対立関係にあるということを明確に把握していくということがとかくむづかしい、わかりにくくなってくる。だから、こういう現象が出てくるのも客観的にみるとうなずけないことはない。だから、あなたのいうような立場自体はよくわかるが、それをどこでふっ切っていくのか。政治的なタクティックス（技術）やマヌーバー（手練手管）からいえば、ぼくは公明党はうまいもんだと思いますよ。この前の党大会には一六単産二十何人か総評傘下の組合役員がずらっと並んだわけでしょう。そこで打ち出したのが、自衛隊と安保の問題だ。その演出は鮮やかだと思いますよ。

そういう中で組合として、いまどこが主体的な力をもっていくものなのか、ナショナルセンターの総評がやるものではないのか、あんたは一体どこに主体的な力を期待しておるのか、それを聞きたいと思ってるんですよ。それがないと観念論みたいな原則論ばかりになりかねない。

厳しくなっている階級対立

岩井　いま前段でいわれた多様化とか多党化というのを、よくイコールで議論するんですね。おっしゃるように多様化というのは、距離がますます離れているという意味じゃなくて、狭い範囲内で自己を主張する。その意味の多様化ということでしょうね。そこで当然接近するし、選択肢の幅は狭まります。昔のように圧倒的に自民党が強いときならただ批判で終わりましたけど。その意味では組合が、あるいは社会党、共産党が具体的な政策の中身を現実の中から少しでもよい方向に、こういわざるを得ない。資本の側も福祉あるいは賃金の面では譲歩せざるを得ない。確かに一般的にいうとそうですね。第二次世界大戦以前だったら、こういう状況になりゃ稲山（新日鉄会長）発言じゃないが当然戦争なんですね。それを求められない限りは、やる道は国内需要の拡大、あるいは国際協調しかない。貿易でけんかしているわけにいかない

ただそのときに独占の方に重点を置いた配分をするか、政治とか、財政とかいうものを大衆の側に少しでも密着したものにするか、そこがやっぱり争われる。ある意味では、選択肢が狭くなればなるほど階級対立は厳しくなる。うんと広い選択肢だったらわりあいに望洋としていられるんだけれども。

もう一つ、最近の福田政治は、ちょっと異質なものをだんだんあらわしている。たとえば先生の専門のスト権の扱いでも、司法反動の状況をみても。それから地方での警察の労働組合に対する介入・弾圧も非常に目立ってる。全国紙に載るほどの大単産には直接やってませんけどね。こんな弾圧的なやり方が、労働者の抵抗が強くて進まなくなったとき、はじめて福

祉政策を容認した政権にならざるを得ない。中道保守ですね。そのときに、それにはみ出した部分に対してはきつく対処する。こういう独占の中の一番右寄りの部分の考え方がずっと前に出てくると思います。私たちとしては、しょせん土俵を共通にし始めてるんですから、原則をより一層身につけてやっていかないと、すっかり丸呑みにされる。そこで先生が最後にいわれたことで、結局それを指導できるのは、とりあえずは総評ですね。総評にそうあってもらいたい。政党の指導では、昔の徳球さん時代みたいに呼びつけて文句をいうという指導はないわけですよね。広い意味で方針を出してバックアップする。党員を通して原則を守るように激励していく。政党の指導はそれ以上にはできません。だけど、そこがいまのところ必ずしも十分じゃない。そこで、どうしても総評の中にいる原則を守る立場の人々が、現場の方で苦労して闘っている連中を激励していく方針をつくる。これしかないと思いますよ。

沼田　それしかないんだろうかね。

岩井　だから総評が敵の網に巻き込まれないようにいつでもしていく。しかし接触はせざるを得ませんね。

沼田　保守陣営におけるタカ派がだんだん前へ出ているということは私が非常に憂えているところで、その傾向は客観的にみても出てくる可能性があるわけです。先ほども話があったように、戦前ならいまごろは侵略戦争ですからね。いまは侵略戦争は行い得ないんだけれど、防衛産業――昔の軍需産業へ傾く可能性が非常に強い。ことに造船造機なんかに至っては、そこへいかなきゃ果たして乗り切れるかという意見まで出てきている。この面で労使が協調していく恐れすら出てこないとも限らない。

稲山発言は本音なんでしょうが、願望でつい口を滑べらせたとして、具体的なポリシーとしては防衛予算をふやす。そして軍需産業へもっていく。やがてもっと金のかかる核の問題とかへ傾いていく。問題はそのとき労働組合が反対し切るかどうかだ。どうチェックするかとなると、やはり福祉志向型の経済を定着させなきゃいけない。だから、そこでの対決という問題がでて日本経済の将来は、きわめて階級的な性格をもってくるんでしょうね。ところが実際には革新政党――社共両党含めてだが――は選挙に従属しすぎている。自主性をもった政策プランがなくて、何かいうとわあっとある方向へだけいく。一兆円減税といったら、そのときはわあっといく。見合いの財源はどこから出すかとか何だとかいうことを詰めないで、かっこうのいいところをやる。年金では二万円にするか一万五〇〇〇円にするかなんていうような量の差だけで出てきている。

実は構造的には質的なものが背後にある。大きなポリシーとしては、独占のやろうとしている方向、つまり現在の不況を乗り切っていくために防衛産業などにいく方向と、この体制の中ではあるけど別の形で乗り切っていこうとする方向との対決の階級的性格というか、これが現象の中ではすべて量的な問題としてあらわれてしまう。そしてさまざまな形での連合が非常に容易に語られる。それをもっとしっかりした土台におろすのには、そういう構造的なものについての合意を踏まえた連合、政策を基礎にした連合になっていかにゃいかんのでしょうね。

岩井　根はあるんですよ。

「連合」という名の保守再編成

沼田　本誌二月号の飛鳥田・槇枝対談や原口論文は、そういってますね。心あるリーダーたちは同じようなことを考えてるのかなとも思うんですけどね。

岩井　ただ警戒心が薄いのではないかと心配になる。先生の話を発展させれば、年金とか住宅とか生活構造の部分に目を向けるにしても階級的な認識が弱いのです。だから量の問題みたいにみえるんですね。実際は生活の土台に目をつけるということは、軍需産業とは両立しない路線なんです。軍需産業に労働者を抜き差しできないように巻き込んでいくという路線に対して警戒心がない。そこを私は一番心配しているんですよ。

総評は非常に困難な賃上げとか制度要求とかに取り組んでいますが、その困難を何かテクニックで乗り越えようというんじゃなしに、困難なことを率直に認めた上で、

対談――大衆を信頼して闘い抜け

しかし原則についてはこう考えるということをいつでも明確にしてかからないと、テクニックで三連敗を乗り切ろうとかいうようにやれば、結局巻き込まれてしまう。巻き込まれたときには指導の中心センターがなくなりますから、新左翼的なものにだんだんだんだん傾斜すると思います。

沼田　一部はね。

岩井　一部は。だから現場で闘っているさまざまな経験を総評が総括して、それを一本の太い路線にまとめていくという作業を、いまこそ総評がしなくちゃいけない。

沼田　私は、いま総評がプリンシプルを失っていると思ってはないが、ただどういう時期にどういうタイミングでどういう形で出すかということは大事な政治的な判断だと思う。まだいろいろの可能性をみながら大いに期待してみているんですがね。そういう線はちゃんと出すとしたら、やっぱりいまのところは総評だろうと思うしね。総評自身が威信低下だとか、官公労と民間との分断だとか、単産が突っ走っていって総評は浮いてしまったとか、いろいろいわれていけれども、それにもかかわらず総評のリーダーシップを抜きにしては今後の運動は考えられない。

対談——大衆を信頼して闘い抜け

運動をやっていくのに労働組合側、また革新政党側が、みずからの姿勢を正すというか。道義的に自分を形成するというか、そういうことに本気にならなきゃいけない。選挙民の喜びそうなのだけでやるというのは、その場はいいけども、長期的にみれば、この政党に期待できるという感情を本当にもたすのは、その政党自身が道義的にしっかりしておらんといかん。派閥的な争いみたいなことやっていてはこまるね。革新政党が一体どのときにぴたっと一緒になるのかしらね。自民党の方がむしろ体制の危機ともなったらぴたっと一緒になるんですよ。まさに独占資本の政党だと思いますよ。必要なときは新自由クラブなんていうのが出て結局、体制に役立つわけだ。

つまり現在は、連合の時代とかなんとかいってるけど、実は保守陣営再編期だと思う。自民党の単独支配という状況が多少困難になってきたから中道政治も含めて保守陣営の再編を進めている。こういうプロセスとしてみないで、連合のタイプは幾つかあると並列的に並べて、いろんな可能性があるようにみせる。ジャーナリズムとしてはおもしろいが、現実は保守陣営、独占の側の再編成が進みつつある過程というものだろうね。

そういう中で理性的だとはとても思えないような形で派閥的な争いに明け暮れているようだと一体、こんごの政権を受けもってもらっていいのかという不安がでる。本当に国民の立場でやってくれるというイメージが出てこない。

かつて私は、公害闘争をろくにやらない組合では市民から浮くということをいって組合の人たちはいささかきげんが悪かったんだけど、「良薬は口に苦し」というじゃないですか。ともかくも革新陣営の運動は、道義的な姿勢がしっかりしておらんといかんのですよ。そういう点が、これからますます強調されてこなきゃいけない。組合とか社会党におって出世した方がいいとかいうけちな考えからでなくて、本当の労働組合運動なり社会主義運動を、生涯をかけるに足る仕事だと考えて有為転変をのりこえてゆく意気をもつ人ならば、そこへこなきゃならないと私は思っているんです。

岩井　それが弱いんです。

評価すべき官公労の戦闘性

沼田　いまからでも、いろいろな人たちが、そういうことを自覚してがんばってもらいたいという気がしているんです。総評に対して寄ってたかっていろいろ何やらいっているけど槇枝、富塚両君も一生懸命だと思う。「官々」だから私企業の労働組合を配慮しているのはよくわかるんです。しかし、同時に民間組合もちょっと考えてもらいたい。官公労はイデオロギー的で行き過ぎているみたいなことをいわれているが、闘う官公労をもっていることは日本の労働運動にとって非常にプラスになっているということを、みんなが評価しなければいかんと思う。官公労

が右寄りにびったりおさまっちゃってストライキはやりません、われわれは全体の奉仕者でございます、公共的仕事をやっているわれわれは、資本の利潤のために働らかされている民間労働者のようにストはやるべきではない、といって動かなかったら一体、民間組合だけでどこまで闘っていけるかしらね。民間組合の闘いは実に困難になりますよ。ところがそういう点を強調しないで、官公労は遠慮している。かと思うと一部では市民の顔を逆なでするような戦術——自縄自縛になる戦術というものが、戦術であろうはずもないが——たとえば、ぼくは近頃はらはらしているのだが、国鉄のストライキのとき電車の横腹にべったりペンキか何かで激しいスローガンを書くでしょう。あんなことといけませんよ。中間層が逃げる。チリ革命の失敗、アジェンデの教訓は中間層を本当にとらえ切れなかったということでもあった。はね上りがおって、それがマイナスばかりかせいだのですよね。こういうものに対する規律ね。私は、組合が民衆の立場で民衆の運動、民衆の利益を守っていくという姿勢の運動をやるのには自己に対する規律を厳しくしなければいけないと思っているんですがね。

そこで官公労の弁護をしたのはそこなんだけど、日本の労働運動は、官公労が勇ましく過ぎるといわれるくらいスト禁止法規の下でも闘っているということを、やはりもっと評価しなきゃいかんのだと私は思うんですよ。

岩井　それは同感です。

沼田　官公労の戦闘的トレード・ユニオニズム（労働組合主義）の意義をもっと強調しておいてもいいんじゃないかな。

岩井　それはおっしゃるとおりで、官公労と民間と本質的な区別はないんですよね。官公労、というよりは公務の現業労働者ががんばっていることは、日本の労働運動をそれなりに支えている。

ただ独占の側は、とりあえずは民間を落とし込む。その次には、いま日経連が攻撃していますよ、「公労協の賃金はけしからん、公労委は何してるんだ」と猛烈に攻撃していますが、いよいよ官公労ですね。その前段として民間と官公労の分断攻撃。その分断状況はやや成功していますよね。

対談——大衆を信頼して闘い抜け

沼田　大変だよね。

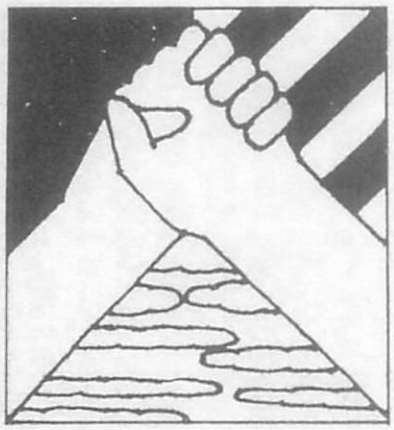
岩井　だから先生がおっしゃるように、官公労が支えてきた今日までの意義、これからの意味をもっと強調することが必要でしょうね。

沼田　それから今日の運動そのものにも関係するんだが、公務員の雇用と賃金に対する攻撃がある。公務員賃金が高い、退職金も年金もよすぎる、人員の削減をやれ、こういう意見がかなり強いでしょう。減量経営の発想を、まず安上りの政府にもってくるんだけど、もっと官公労も総評も、その発想と対決してもらいたいね。

むしろ公務員労働組合で問題なのは、労働規律ないしは事なかれ主義の侵透の方にあると私は思っている。もっと能率的に働いてもらえば人は足らんくらいです。やるべき仕事がいくらでもあるのだから。それから賃金も別に高いことはない。労働条件はいいことはいい。そこにどっぷりつかって、仕事をしない者がいるときにどうにもならないといえ問題です。それは労働規律の問題で、組合みずからきちっとやらにゃいかんと思いますね。

それはそれとして、いま雇用がこれくらい苦しくなっているときに、公的機関こそがもっと雇用をふやしていい。そのために週休二日制とか労働時間の短縮、それに対してもっと本格的に官公労自身が取り組まないといかんね。そうすれば雇用はふえますよ。それが役人的ずるさというのかね、民間から攻撃されるとカメが甲らの中に引っ込んでいるように「内部努力」なんてものをやってみせてね。嵐が過ぎると、また首をにょこにょこと出して、いつの間にか勤務状態を元どおりにしてしまう。それは公務員としては利口ですが、それこそプリンシプルをもっと明確に打ち立てていって週休二日制実行、労働時間の短縮、残業の縮減なんていうことをやればいいんですよ。それから、ぼくは定年制もやったらいいと思っている。六三歳と思っているんですけどね。そうしなかったら、一つ絡んでくるのは年金財政がもたなくなる。全体に老齢化社会に対応していくのには定年延長は当然のことなんですね。定年延長と年金とを接合させていく運動といっておきながら、公務員には定年制はしきませ

んといったら、結局のところ周りの人が迷惑しているような老齢労働者まで抱えるという、民間労働者とのバランスを失った形、一種の特権にあぐらをかく形になりますね。こういうことの方が不自然なんで、さしあたり管理職もふくめて六三歳定年にすればいいんです。本当はぼくは将来六五歳になると思うが、過渡的には六三歳なら六三歳で定年制をひいて六三歳すぎたら年金で食えるようにする。こういう構造を大きくとらえて、雇用もふやすように労働組合は自信をもって運動してほしいね。日本なんか残業減らしと労働時間短縮で週休二日制に公務員と銀行がふみきれば、失業はまだかなり減



りますよ。

岩井　そこは階級闘争ですね。独占の方はそう考えていませんから。

沼田　そうなんだね。そういう発想がもうすでに体制側やマスコミによって方向ちがいにもっていかれているんだね。

岩井　先生がいうように、官公労の労働運動が民間なり日経連から攻められているため、積極的に意見を組み立てるということに不十分ですな。

沼田　そうですね。

岩井　官公労が親方日の丸だなんていわれたって、ちっとも恥ずかしいことでもないし、元気をなくすこともないんですからね。

沼田　ところが、そういわれるとしゅんとなっちゃって頭を引っ込めちゃうんだな。

岩井　それは全く同感。それから戦術の問題として、汽車の横っ腹に書くのはいけませんね。仮に横っ腹へ書くにしても、きたない字じゃなくて、とりあえずきれいなビラを張る……。

沼田　そうです、ビラぐらいに。わざわざペンキで書くなんて公のものに対して……。

対談——大衆を信頼して闘い抜け

岩井　しかもわけのわからんことを書いてるんだよ。セクトがセクトを攻撃するような種類でしょう。あれはいけませんね。そういうのはスト権のない状況の中での抵抗の手段としてひと頃はあったけれど、だんだん少なくなってきた。組合の方も積極的に少なくしなきゃいけません。

同時に、働くという問題についても、私も国労の学校でよくいうんです。若いうちはよく働きなさい。年配になったら社会が年金でめんどうをみる。働くということは物を生み出すということなんだから、それをどっち側がたくさんとるかというのはその次の争いで、物を生み出すということを頭から否認することはできないんだからと。そこが一つ徹底していませんね。運動の方はもっと自信をもって、ストライキなんかについても遠慮することはない。

アジェンデの教訓と組合運動

沼田　チリ革命の失敗、アジェンデの教訓は、共産党も社会党も一応くみとって柔軟路線を出していると私は思っているんだけど、組合運動もそれを考えなきゃいけないということですね。要するに、どこの政党へ一票入れますかというアンケートをみると、いま下手すると浮動票の方が多いじゃないですか。意識における中間層ですが、客観的にはまだ無産階級ですよね。うそだと思ったら半年財産で食ってごらんといったらわかると思う。多くの労働者三カ月ぐらい食えるけど半年は財産だけで食えない。とても中産階級とはいえないのだが、主観的には、みんな「中の中」なんですね。そういう「中の中グループ」というものを本当に把握し得る、納得できる論理をくみ上げていくことですね。大衆の立場に立つ経済の再建という方式は、もともと説得力はあるんですよ。それをもっと打ち出していって大衆に理解してもらって、大衆自身がそれを意識して、組合運動の周りに接着してくるようなリーダーシップを、これからのナショナルセンターがもってもらわにゃいかんのじゃないかね。

岩井　ただ大衆の理解を得られるということは、自分が原則をも

ってて積極的に訴えること、それから戦術をくむ際にも柔軟な姿勢をとることだと思う。ところが大衆が受けとめるんだからというんで、原則まであいまいになる危険性がいまの社会状況の中じゃあるわけですよ。

沼田　ある。それが目前の選挙への慌ただしい追随になってあらわれる。長い目でみたら、あんなのどっちへでもひっくり返っちゃうんだがね。

岩井　おっしゃるように独占に対して大衆の利益を守るという一線で、どのように政策をつくるのか、どのように運動の戦術論を組み立てるか、それをはっきりさせておかないと単なる大衆迎合に終る。しかも先生がいうように「中産」というのはマスコミがつくったんです。最近ではイデオロギーの終えんというのをやたらはやらせている。こんなものはないんですよ。終えんすれば自分の方のイデオロギーだけが幅をきかすだけでね。

そこで連合の問題ですが、連合というのは、多党化だから連合というように発想されがちなんですが、私はそうじゃないと思う。そういう形だけのことじゃなくて、統一をどうするかということがそこにあるんだと思いますね。私流にいわせれば統一戦線なんですが。統一というのは、一定の目標をちゃんともっていることです。算術的に国会の議員の数を合わせるために、こっちとあっちを足すというんじゃなしに、一定の目的を明確にして統一する、あるいは連合するでもいい。その一定の目的というのが――これはもちろん政策化されなきゃいけませんけれども――それがいまほとんど議論されていないんじゃないですかね。

沼田　そのとおりですね。

岩井　ただ連合の時代といわれているだけで、それがどういう内容のものかを、もっと明らかにする必要がある。

沼田　それに対しては先ほどもちょっといったけど心あるリーダーたちは考えているわけでしょう、あなたも含めてだが。それをもっと各政党が考え、組合が考え……。大体、組合の統一闘争と連合とは違うし、それから連合というのは人民戦線的とも必ずしもいえないでしょう。連合、連合といって、連合政権がすぐできるようにいうが、そんなに簡単ではない。この三月に総選挙があるフランスでは左翼連合と保守連合の対決が焦点になっている。あのぐらいいったときは連合の意味も出てくると思うけど。

岩井　左翼連合内での社共のけんかが出てますが日本では、そこまでもまだいってません。

沼田　まだとてもですね。口だけで連合、連合といいながら、結局保守の再編成の過程に連合時代というイデオロギーがまんまと乗せられていっている。そこを洞察して、もっと具体的な政策論議を大衆の中へおろしていく必要がある。大衆の中におろせば、少なくとも社共両党のいま掲げておるいろんな政策をみると説得力があるよ、もっと具体的に攻めていけば。

岩井　ただわれわれの運動で一つ反省するのは、イデオロギーは、いつの場合でも背骨みたいなもんですからあるんですよ。だけどイデオロギーだけでは、いまや納得させられないんですね。そこがいままで必ずしも十分じゃない。イデオロギーが政策論や運動論にちゃんとなってないとね。この点が私たちにいままで不十分なんだ。

沼田　そのとおりですよ。もう一つ振り返ると、逆にイデオロギーがはっきりしておらん。イデオロギーが政治的側面だけのイデオロギーに終わっているのですね。もっと全体の把握ということが本当のイデオロギー的把握でしょうがね。

岩井　文化とか思想とかすべてのもの……。

沼田　そういうものをつかまえてマルクスはイデオロギーといっているわけですが、現在はそれが弱いよね。

戦後民主主義の再評価を

岩井　そこがいまのこういう困難な状況になると、一番もろさとして出てくるんですね。

沼田　そうですね。だけど、何といったって革新政党並びに労働組合が戦後民主主義を守っている最も大事な勢力だと思う。ぼくは、いまは戦後民主主義を原点に返って評価し直さなきゃならん時期だと思う。これはファシズムの闘いの中から生まれた戦後の思想です

よ。デモクラシーという言葉自身は、大体、デモ＝人民のクラシー＝統治なんでギリシャ時代からある。デモクラシーは人民によるという手続の問題であって、人民のための政治というのはデモクラシーでなくたって、ヒトラーだって人民のためにやっているというし、人民を代表するというのもどんな独裁政治家でもいえるわけ。啓蒙君主はみんな人民の代表だと思っているんだから。問題は、デモクラシーとは人民によるという手続なんですね。啓蒙期のフランス革命時期のデモクラシーは正義、人道、個人主義的思想と結びついたデモクラシーとして歴史的な意味をもっていた。戦後のデモクラシーは、ファシズムと闘ってきた中で、国民がいやというほど感じさせられた人間の尊厳ですよ。人間の尊厳という概念自身は昔からあるが、第二次大戦後にこれが自覚されたときは、単に個人の抽象的自由じゃなくて生きた人間の自由としてであってそのうえに民主主義があるんですよ。だから戦後民主主義は反ファシズム、反戦というファクターを含んだ民主主義なんですね。そのことをはっきりしておかないと民主主義が形骸化します。民主主義の名前によって幾らでもファシズムができるという可能性がある。戦後民主主義の本来のエスプリ（精神）というか、人間の尊厳の理念を全体制的に浸透させるということです。その担い手、運動の主体は、何やかんやいっても生産労働者の組織、そしてその自覚的集団としての革新政党だと思いますよ。

対談――大衆を信頼して闘い抜け

岩井　その民主主義が争点にならないようにし向けているんですね。民主主義の名前において弾圧したり、公害を認めたり、そういうことを平気でやる。社会党の立場でいえば、平和原則というようなものも今日的に意味をもう一遍洗い直さないと、ただ戦争反対だけでは、いまの若者たちを納得させ切れないんですね。

沼田　ある出版社の若い青年は、われわれの中じゃ平和と民主主義なんていうのはシラケ・ムードですよという。それくらい形骸化された言葉になりつつあるということは恐しいことですね。日本を再び不幸にしないために戦後民主主義を浸透させ、定着させるということが絶対に必要だ。その主体的勢力は現実的に考えれば労働組合、ことに戦闘的労働組合だ。いろいろの欠陥をもつにかかわらず、それが立ち直ることに期待するということです。

岩井　運動論の面でいうと、飛鳥田さんもバイ・ザ・ピープル、（人民による）ということを強調している。一人ひとりの労働者がもっているエネルギーをどう組織していくか、この観点が非常に重要ですね。大衆のためにということはだれでもいう。だけど大衆のためになる行為をするだけがいま問題じゃない。大衆一人ひとりをどうやって組織するか、先生がおっしゃるように一人ひとりのエネルギーをどう組織するか、これが運動論でもあるし、長期的な戦略に結びつく課題だ。困難な条件を切り開いていく道はここにあると思います。

沼田　間接民主主義、議会制民主主義というだけでは下手すると形骸化する。現にヒトラーが出てきたときだって、受権法なんていう法律を議会がつくって渡すんだから。戦後の民主主義というのは議会制民主主義の基本に立っているけれども、これに活性をもたせるためにデモの自由、表現の自由、さらに参加＝パーティシペーションというか、参加という言葉がきらいな人は近ごろ民主的規制とおっしゃいますが、どっちでもよろしい。そういうものが絶えずいろいろな社会集団によって行われることによって議会制民主主義そのものが生きてくるという考え方が戦後民主主義ですよ。そこをもっと明らかにしなきゃいかん。その一つのポイントとして、市民一人ひとりが政治社会に自分も何がしかの主権者として参加をしているという意識をもたせなきゃ、民主主義は本当には定着しないという発想ですね。私もそうだと思うんです。政治・経済を変えていく主体的な勢力として現在の組織労働者にがんばってもらわなきゃいかんだろうと思います。

岩井　いま現象としちゃ困難だけど、労働者がこの困難を突破する近道はない。しかし、必ず道を切り開いていけるという確信をもっていい。その結集体としての総評には長い伝統があるから腐り切ってしまうことはない。労働者を信用して闘い抜くだけが包囲網を突破する道だと思います。